

厨子入り木造吉祥天倚像 重要文化財

美と繁栄、富の神である吉祥天は、ヒンドゥー教の美と幸運の女神であるラクシュミが仏教に取り込まれたものである。この像の基壇に記された銘文によると、この像は1340年に仏師の寛慶によってつくられた。興福寺の中金堂の中央祭壇の後ろに北向きに、本尊と背中合わせで設置された。1717年に中金堂が破壊されるまで、この像は新年に平和と繁栄を祈る吉祥会（ラクシュミの祭礼）の本尊として使用されていた。

吉祥天はカラフルな袖の広い衣を着て台座に座り、精緻な宝冠をかぶっている。左手の手の平には如意宝珠（願いを叶える宝玉）を持ち、右手は見る者を招き寄せるかのように広げられている。像の内部には紙に墨で描かれた種子曼荼羅や、五穀や五宝などが収められている。厨子の扉の内側のパネルには、インドの神である梵天と帝釈天が描かれており、背面のパネルには白象が鼻で持った器から如意宝珠を撒き散らしている様子が描かれている。厨子の扉は毎年新年の7日間だけ開けられる。